

# アグネス・レプリアの英国趣味

— 「アメリカのオースティン」の半世紀 —

鈴木 健 司

## Abstract

Agnes Repplier, an American essayist and critic born in Philadelphia, wrote for more than a half-century from the late 19th to the early 20th century. Her writings appeared in almost every major magazine and newspaper and gained a wide range of readership and a high reputation in the United States. Some call Repplier the “American Austen,” after her favorite English novelist, as she stayed single her whole life and sometimes dealt with women’s life from a literary perspective.

Repplier loved literary works by English authors, from the last quarter of the 18th century and the first quarter of the 19th in particular, which she called “a happy half-century.” She put a high value on realism in literature, but Anglophilia also held a prominent position in her set of values. As a result, she didn’t go along with William Dean Howells, an ardent advocate of realism, because he often described the English nation pejoratively.

In contrast with a keen interest in English literature, Repplier showed little enthusiasm for her countrymen’s works, which evoked staunch criticism from those who aimed for due recognition of American literature. How Repplier’s contemporary Americans accepted her writings gives a promising clue as to American nationalism in this period, when cultural independence is a critical issue a century after the birth of the United States.

## 序

アグネス・レプリア (Agnes Repplier, 1855-1950) は、19世紀後半から20世紀前半にかけて活躍したアメリカのエッセイスト・批評家である。フィラデルフィアに生まれ、家庭の事情から若くして文筆業の世界に入って成功を収め、文芸批評をはじめとするそのエッセイは、半世紀以上にわたりアメリカのほぼ全ての主要定期刊行物で読まれ続けた。博識で、たびたび海外に出かけて見聞を広げた国際人でもあり、数少ない女性の知識人として当時のアメリカで広く知られた存在であった。

レプリアはイギリス文学を好み、とりわけ18世紀後半の四半世紀から19世紀前半の四半世紀にかけた時代を愛した。その文学的嗜好はエッセイ集の表題となった「幸せな半世紀」(A Happy Half-Century) という語に象徴されている。イギリス文学への情熱とは対照的に、レプリアは自国文学にはほとんど関心を持つことがなかった。

歴史学者ジョン・ルカーチ (John Lukacs) は、自ら長年住んだフィラデルフィアの歴史を描いた書物にレプリアの一章を設け、彼女を称して「エッセイ界のジェイン・オースティン」と表現した<sup>1</sup>。後に編纂したレプリアの作品選集には『アメリカのオースティン』(American Austen)<sup>2</sup>と表題を付けた。レプリアの、書くことを早くから始め95年に及ぶ生涯を独身で通した私生活や、機知と英知に富んだ文章などには、確かにイギリスの偉大な女性作家との共通点が見られるかもしれない。しかし評論を中心とするジャンルの特性もあり、レプリアの著作は後の時代にまで読み継がれることにはならなかった。レプリアが現実にはオースティンに比肩する存在として見られてはいないことを、ルカーチは「大きな、願わくは一時的な、損失」であると述べている<sup>3</sup>。

レプリアの活躍した時代は、彼女の愛した「幸せな半世紀」からちょうど100年後の半世紀を含む、20世紀への転換期と重なる。当時のアメリカは独

立100周年を経過して経済的發展を背景に大国となる途上にあり、その文学・文化の独自の価値を確立して精神的にもイギリスからの独立性を明確に示すことが重要な課題として認識されるようになっていた。そのような中で、イギリス文学を偏愛するレプリアの文芸批評が多くの読者を獲得し論壇で評価されていたことは、アメリカの文化的独立の過程を考察するにあたって注目に値する。

レプリアについては作家と近い人物の手からなる伝記が複数残されており、いずれも作家自身の語った言葉に多く言及されている。本稿では、まず姪の著作<sup>4</sup>及びレプリアの言葉を残すことを意図して記録していた知人の著作<sup>5</sup>の二冊における記述を軸として、アグネス・レプリアの生涯を概観し、現代では知られざる存在となったこのエッセイストの足跡をまず整理する。そのうえで、レプリアの著作からイギリス文学への傾倒が顕著に見られる部分に焦点を当て、その文学的見解について検証する。イギリスに偏向したレプリアの文学的関心は、アメリカの文化的独立を推進する立場からは、好ましくないものとして批判された。このようなナショナリズムをめぐる議論との関わりにおけるレプリアの位置付けについても考察する。

## 1 フィラデルフィアから世界へ

アグネス・レプリアはヨーロッパ系の血筋を引いている。父方の祖先はフランス人で、ドイツ国境に近い北東部ロレーヌ地方に住んでいたが、曾祖父の時代に高率の税を嫌ってアメリカに移住した。アグネスの父ジョンはペンシルヴァニア州レディング出身で、アグネスの母とは再婚であった。母方の祖先はドイツ系で、母アグネス・マティアスは18歳のときにジョンと出会い、結婚した。アグネス・レプリアは、姉メアリーに次ぐ二番目の子として、1855年にフィラデルフィアで誕生した。

アグネスはミニ（Minnie）という本人の望まない愛称で育てられた。彼女は不器量な娘と見られていることを自覚しており、弟ジョンが誕生した

際に母が「神はようやく美しい子を与えたもうた」と喜びの表情を見せたことを記憶している<sup>6</sup>。そしてその母は、知人の訃報に接した折には「役立たずの子どもたちはここに座っているのに」と叫んだのであった<sup>7</sup>。母は常に強い態度で娘たちに接したので、温かい情愛が感じられることはなかったようだ。アグネスは「両親は私と交わろうとしなかった。私も本能的に両親を避けた」と幼少期を回想している<sup>8</sup>。

母のしつけは厳しかったが、アグネスは満足に家事ができるようにはならなかった。母は読むことも熱心に教え、その努力は当初は全く効果を発揮しなかったが、やがてアグネスは読書への関心を増し、10歳で『ファウスト』の翻訳を読了した。こうして厳しい家庭環境で知性と自立心を育んだアグネスは、冷淡に見える母娘関係の中でも、母への尊敬の念を失うことはなかった。

父母は、いずれもカトリック教徒であった。アグネスは、フィラデルフィア郊外のトレスデールにあるエデン・ホール女子修道院付属学校 (Eden Hall Convent) に10歳で入学した。ここでアグネスは生涯の親友となるエリザベス・ロビンズ (Elizabeth Robbins, 1855-1936) と出会うことになる。学校はアグネスの知的好奇心を大いに刺激し文学への情熱も高めてくれる場所であったが、彼女は持ち前の独立心を遺憾なく発揮し、教師に反抗することもあった。それは厳格なカトリック学校で許されることではなく、アグネスはエデン・ホールを放校となった。

14歳のアグネスが次に通うことになったのは、新設されたばかりのアグネス・アーウィン・スクール (Agnes Irwin School) であった。校長のアグネス・アーウィン (Agnes Irwin, 1841-1914) は、ベンジャミン・フランクリンの血を引く学者肌の教育者で、後年にはラドクリフ大学の初代学生部長を務めた人物である。アーウィンが家庭の責任を重視したので、アグネスは母の監視下での学習を余儀なくされた。エデン・ホールとは異なり親しい友人もなく、アグネスにとって学校生活は退屈なものとなった<sup>9</sup>。彼女の反

抗心は相変わらずであり、読書に関して自分なりの嗜好も持つようになっていたので、教師の指定する本が気に入らなければ読むことを拒否することもあった。やがてアーウィンの忍耐も限界に達し、入学から1年半で、アグネスは再び学校を去ることになった。

1871年、アグネスが16歳のときに父が事業で失敗し、レプリア家は経済的危機に直面することになる。姉メアリーは生徒を取って教師として働くことになった。そしてアグネスの読み書きの資質を熟知していた母は彼女に対して、文筆業で身を立てることを命じた。当時の新聞や雑誌は、記事に混ぜて情報量を増すための埋め草として、物語や詩などの小文を常に求めていたので、素人の少女にも参入の余地は十分にあった。こうしてアグネスは書くことによって一本当たり数ドルの原稿料を稼ぐようになった。地元紙やカトリック信者向け雑誌が主な寄稿先であった。これがその後六十年余りに及ぶアグネス・レプリアの執筆活動の始まりである<sup>10</sup>。経済的理由から一家はフィラデルフィア西部に転居したが、アグネスは執筆のために図書館を利用する必要があり、都市部に留まった。

1881年には短編「アルカディにて」(In Arcady)が宗教誌『カトリック・ワールド』(Catholic World)に掲載され、アグネスは次第に大きな発表の場を得るようになっていく。1886年4月には、有力誌『アトランティック・マンスリー』(Atlantic Monthly)にエッセイ「子ども、過去と現在」(Children Past and Present)が掲載された。さらには他の主要雑誌にも発表の場を広げ、アグネス・レプリアは業界で第一人者としての地位を確立した。ただ、雑誌の記事はいかに反響が大きくともその場限りで読み捨てられる運命にあることを、彼女は知っていた。そのため雑誌での実績を重ねた後、1888年には既刊の文章をまとめてエッセイ集『書物と人』(Books and Men)の出版に漕ぎつけた。1882年に母を1886年に父を失い、家庭的には不幸が続いたが、彼女にとって1880年代はキャリア形成の面では大きな実りのある時代であった。

アグネス・レプリアの文筆業が早期に軌道に乗ったのは、文壇での人間関係に恵まれたことも大きい。なかでも特筆されるのは、1884年7月にニューヨークで『カトリック・ワールド』編集者のアイザック・ヘッカー神父(Father Issac Hecker) から助言を受けたことである。ヘッカー神父から見ると、この若い女性作家が書くストーリーはいかにも無機質なものと感じられたのだろう。「あなたは書物のことほどには人生のことをよくわかっていないのではないか。あなたは観察者というよりも読者なのではないか」<sup>11</sup>。ヘッカー神父はこのように述べてレプリアの読む書物(著者)を尋ね、「ラスキン」<sup>12</sup>という答えを引き出すと、ラスキンについての文章を書かせた。これによってレプリアは自分の内面に存在するものと向き合って執筆することを学んだのである。

頻繁に行われた海外旅行もまた、レプリアの知見を高めたもう一つの要因と言えるであろう。最初の渡航は、姉メアリーも同行した1890年夏のヨーロッパ旅行で、当時レプリアは35歳であった。パリ、ローマ、ヴェネツィア、ベルリン、ミュンヘン、ロンドンなどをめぐっており、ロンドンではエデン・ホール以来の親友エリザベスとの再会も果たした<sup>13</sup>。「海外に出かけることは作家にとって当然の願いである」とレプリアは後に語っている<sup>14</sup>。

文筆家としてひとまず成功を収めたレプリアであったが、収入は安定しているとは言い難く、生計を立てるためには活動の幅を広げる必要があった。少女時代の師であったアグネス・アーウィンからの助言もあって、1889年からレプリアは講演活動を始めることにした。この活動は性に合っていたようで、その後も長く続けられ、レプリアは講演者としても人気を上げていく。あるときボストンで行われた講演会で、控室のレプリアに来場者の会話が聞こえてきて、その一人は講演者がフィラデルフィア出身と知って「それならプリンマーの卒業生に違いない」と言ったという<sup>15</sup>。レプリアはこの逸話を好んだ。

主要雑誌にエッセイが絶え間なく掲載されることに加えて、講演で聴衆を

前に語る機会も増え、レプリアは知識人としての存在感と社会的影響力を増していった。1910年代以降は、第一次世界大戦以降との関わりで自国の政治や社会に対する洞察も示されるようになった。このような過程を経て彼女の言論活動は全米で広く知られるようになり、その功績は学界や宗教界でも高く評価されて、多くの賞や名誉学位により称えられた。1902年にはペンシルヴァニア大学から文学博士を授与されたことに始まり、その後もイエールやコロンビアを含む複数の大学から学位を授与された。1903年にはバチカンでローマ教皇レオ13世に謁見した。1911年にはノートルダム大学から、社会的に著しい功績があった信者に贈られるレイターレ・メダル<sup>16</sup>が授与された。このような長年にわたる活躍により、1926年には女性として初めてアメリカ芸術文学アカデミーの会員に選出されている。

最晩年のレプリアは、体調を崩した後さすがに執筆意欲も衰え、1940年1月に『アトランティック・マンスリー』に掲載されたビクトリア朝時代の文学者であるハウスマン兄弟について論じたエッセイが、批評家として最後の原稿となった。最後の7年間はアパートメントで独居しながら、古い時代の好きな文学を読んで余生を送った。寝室で転んでからは動くことも稀になったが、その知性は依然として研ぎ澄まされており、誕生日になるとフィラデルフィアの新聞記者たちがインタビューに訪れた<sup>17</sup>。レプリアは、広く世界に知られることはなくとも世代を超えて幸運な読者の友となっている著者たちに連なりたい、と望んでいたという<sup>18</sup>。作品が一般の読者に読み継がれることは叶わなかったが、20世紀への転換期を挟んだ半世紀におけるアメリカ文化史を見るにあたって、レプリアの存在は見逃すことができないものである。

## 2 イギリス文学の幸福な時代への追憶

アグネス・レプリアは、イギリス文学を論じたエッセイ「幸せな半世紀」(A Happy Half Century)の冒頭で、18世紀後半の四半世紀と19世紀前

半の四半世紀が、自分にとっての選りすぐりの時代であることを告白する。そして、この時代について、「少なくともイングランドでは、機知、公德、愛嬌などの面で際立ってはいないが、文学的評価を易々と得ることができ、それについては誰も失望する必要がなかった」<sup>19</sup>と述べている。実際、この時代のイギリスでは多くの優れた作家が輩出した。

レプリアは、19世紀初頭に出版された人名録<sup>20</sup>で女性劇作家ハンナ・カウリー (Hannah Cowley, 1743-1809) の項で用いられた「誇るべき卓越」(proud preeminence) という語を引いて、この時代の卓越した女性作家たちを挙げていく<sup>21</sup>。それによれば、この時代はフランシス・バーニー (Frances Burney, 1776-1828) に始まりジェイン・ポーター (Jane Porter, 1776-1850) に終わる。ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) は「一等星」として特記されている。その後の新しい時代は冷たく批判的で議論ばかりしており、古い時代の穏やかな不条理や主情的な感情表現を許さない。100年遅く生まれた不幸者たちは黄金時代を羨望の眼差しで振り返る、という主旨を述べてこのエッセイは結ばれている。

一見すると、当時の作家の環境を羨む文章にも見える。しかしその本質は、この時代に生み出されたイギリス文学への敬意であり、レプリア自身が高く評価するこれらの作品群の価値がありのままに受け入れられた時代への賛辞であることは、容易に理解される。

レプリアは、一世紀ほど前には小説が人間をあるがままの姿に描いていたと考え、その事実を肯定的にとらえている。そして、時代が下るにつれて価値観が作品の内容を支配するようになったことに異を唱える。そのような立場は次のような記述に顕著にうかがうことができる。「曾祖父たちの時代、小説は、ただ小説だった。十中八九、小説が道徳的であることはなかったし、そのようなことがあれば曾祖父たちはそれを陽気に笑い飛ばしていたのだ」<sup>22</sup>。「なぜ小説が道徳を情熱的に叫ばなければならないのか。いかに行儀良くふるまうかを示すことは小説家の仕事ではない。人に何かを教えることはフィ

クションの役割ではない<sup>23</sup>。

レプリアの立場は、アメリカ文学界でリアリズムを先導したウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells, 1837-1920) と共通点を持つ。ハウエルズは、リアリズムについて次のように述べる。「リアリズムの効用の一つは、人間というものをわかるようにしてくれることだ。例えばスペイン人は、ロマンスが描くような、ギターや短剣や兵舎や異端者の火刑や懺悔にあふれた遠い怪しげな連中ではない。我々と同じく、人間らしい存在なのだ<sup>24</sup>。その点についてハウエルズが高く評価していたイギリス人作家は、オースティンであった。「リアリズムとは素材を真正に扱うことであって、それ以上でも以下でもない。ジェイン・オースティンは、素材を完全に真正に扱った最初で最後のイギリスの小説家だった<sup>25</sup>。

レプリアは、「幸せな半世紀」を憧憬の念をもって振り返りつつ、女性の生き方をどのように描くかについても言及している。「このような見方（貞節や善良さを重視する価値観）を乱すような無分別な疑問は、曾祖父たちの時代にはなかった。ウェスト<sup>26</sup>は聖職者からもお墨付きをもらった『若い女性への手紙』(Letters to a Young Lady) で次のように述べた——私たちは間違いなく男性の結婚相手として創られたのだ。自然の意図するところは、男性は求め、女性ははにかんで応じるということだ<sup>27</sup>。人間と社会をありのままに描かれることを支持するレプリアにとって、このような価値観が現れる小説は当然、好ましいものであった。彼女の信仰や、母や学校による教育との関係がどうであったかは定かではないが、レプリア自身、保守的であった。

18世紀イギリス文学におけるリアリズムの作風を支持し、オースティンをその頂点として位置付けているという点で、レプリアとハウエルズの価値観には共通点がある。しかし決定的な相違があった。それはイギリスという国やその国民に対する姿勢である。

ハウエルズは、イギリス文学の衰退をリアリズムとの関係で論じるだけで

なく、イギリス人に対する否定的な表現を頻繁に用いた。例えば、批評に関する議論でも、殊更にイギリス人の特性と結び付けて論じようとした。「イギリス人は、知性は十分だが、感性を十分に持ち合わせていない。あるいは彼らの感性は、誤った批評によって歪められてしまったのだ。誤った批評は、原理ではなく個人的嗜好に基づいており、好みにかかわらず良いものを区別することを教えず、好きなものは良いものだと考えることを教えてしまう」<sup>28</sup>。民族的多様化が進行していた当時のアメリカでは、固定観念に基づいて国民性を論じることは普通に見られ、ハウエルズはそれを文学批評の場で行ったのであった。

ハウエルズは、一度ならずイギリス人を「哀れな島民」(poor islanders)という言葉を用いて侮蔑した。「イギリスの小説家たちは、なぜ平易に正直に芸術的に書くことができないのだろうか。(中略)読み書きとは生来のものであるとはいえ、その中にあるセンスは磨くことができるものであるし、いったん磨かれればそれを保つこともできるはずだ。それなのにあの哀れな島民たちはなぜそうではないのだろうか」<sup>29</sup>。「あの哀れな島民たちがやがて変わることは間違いないだろう。真実が流行となるならば、それは彼らの中の賢者に受け入れられるだろう。けれどもそのようなことが起こるには真実は大きすぎる。我々は彼らの間で文明が徐々に進歩していくのを待たなければならない。そうすれば、彼らは自分たちの批評が彼らを誤った方向に導いていたことを悟るだろう」<sup>30</sup>。イギリス人が英語による言語文化の正統的な担い手であるという社会通念に異を唱えてアメリカ文学の価値の再認識を訴えるという論法は、決して珍しいものとは言えない。しかし、ハウエルズの用いる語句は過剰に挑発的であった。

レプリアは、これらの表現に対して、明らかに強い不快感を表明している。イギリス人がオースティンと同様にジョージ・エリオットやサッカレーを愛好していることを理由に、あたかも南方の海で裸で踊っている人々のように「哀れな島民」呼ばわりするハウエルズは、とうてい正当化されるものでは

ない。このようにレプリアは断言する。そして、オースティンのみを評価して他のイギリス人作家の価値を否定するような見解を戒めるのである<sup>31</sup>。

レプリアにとっては、イギリス文学のみならず、イギリス自体が称賛に値する対象であったと言える。エッセイ「仲違いの海」(The Estranging Sea)では、イギリス人がアメリカ人やフランス人の性格に似ることを懸念していることなど、ときに皮肉を含んだ視線を向けながらも、基本的にはイギリスへの肯定的な姿勢は揺るぐことがない。「イギリス人は多くの好ましい特質を持っているので、彼らが考えたり望んだりするほどに嫌われることはできない」<sup>32</sup>。「大陸においてさえ、敵意がたちまち広がってしまう不思議な旅行者の世界で、丁寧な言葉は雑になり、どこの国の人々も最も嫌な面を出してしまうのに、イギリス人が不人気の頂点にそびえ立つことはない」<sup>33</sup>。そして、そのような国民の特性が普遍的なものであるとの認識を示して、確固たる親英的立場を見せるのである。

### 3 ナショナリストからの批判

アグネス・レプリアは、イギリス人の英語にも美を見出していた。1890年の最初の海外旅行でロンドンを訪れた際には、イギリス英語の響きに魅了されて次のように述べたと伝えられる。「英語のすてきなイントネーションに驚く。そして残念に思う。私はなぜあのように話すことができないのか」<sup>34</sup>。このことは、レプリアが文学理論とは関わりない次元で、感覚的にもイギリスの言語文化に愛着を抱いていたことを、象徴的に物語る。そのことはレプリア自身も強く自覚しており、晩餐会のスピーチで次のように語ったこともある。「イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドのどの血も一滴も入っていないのに、私はイングランドの言語と文化を比類のないほど受け継いだ。そのことが私の人生の幸福となった」<sup>35</sup>。

レプリアはイギリス文学に造詣が深く、それについて多くを論じた一方で、アメリカ文学にはほとんど関心を示さなかった。その根底には、アメリカは

旧世界であるヨーロッパに全てを負っている、という認識があったといつてよい。ある講演で、レプリアは次のように語ったと伝えられる。「ヨーロッパの未開状態から、緊張と混乱から、喜びと悲しみから、勝利と敗北から、法と自由が、芸術と文学が、美とロマンスと榮譽が、人生を生きるに値するものとしてくれる全てのものが生まれたのだ」<sup>36</sup>。

当然のことながら、レプリアがアメリカ文学に言及することは少なく、その著作はイギリス文学への偏愛を感じさせることとなった。1892年にレプリアは子供向けの詩のアンソロジー『有名な詩の本』(A Book of Famous Verse)の編集を試みている。出版社の要請による仕事だったこともあり、その意向を汲んで、アメリカのロマン派詩人ウィリアム・カレン・ブライアント(William Cullen Bryant, 1794-1878)の愛国的な作品「マリオンの男たちの歌」(Song of Marion's Men)なども収録せざるをえなかったが、レプリアにとっては何の愛着もない作品を取り上げるのは本意なことであった<sup>37</sup>。このような例外を除けば、レプリアが論じるのは常にイギリスの作家や作品であった。彼女の文章には引用が多かったが、その源となるのは決まってイギリス人であった。

愛国主義的な論者の目には、自国を無視するかのようなレプリアの言論は、愛国心が欠けているものとして映った。なかでも、文芸批評家の立場からアメリカの文化的独立を推進しようと文壇で勢力的に発言していたブランダー・マシューズ(Brander Matthews, 1852-1929)は、レプリアを酷評した。「ミス・レプリアはとても賢く、とても植民地的だ。フィラデルフィア生まれであるのに、独立宣言について聞いたこともないようだ。彼女が付き合っている人々から判断すると、次のように推論しても差し支えないだろう。彼女は自分自身が哀れな島民でないことを残念に思っているようだ」<sup>38</sup>。フィラデルフィアは1776年に独立宣言が発せられた地である。独立宣言を聞いたことがないというのはレプリアにアメリカ的精神が欠落しているという指摘に等しい。レプリア自身を刺激した「哀れな島民」というハウエルズの表現を用い

ているのは明らかな当て付けであり、全体が辛辣な皮肉にあふれている。レプリアの引用についても、文学的センスを欠いているように見え「彼女にとっては現代のイギリス人であれば誰でも同じであるようだ」<sup>39</sup>と、半ば呆れた様子を見せている。

このような言論攻撃には、当然のことながら反論も寄せられた。レプリアの強力な援軍となったのは、イギリスの詩人アンドルー・ラング (Andrew Lang, 1844-1912) である。ラングは、1891年にレプリアの『アトランティック・マンズリー』デビュー作となった「子ども、過去と現在」で中世の神学者ギベール・ド・ノジャン (Guibert de Nogent, 1055-1124) が取り上げられていたことから、共通の関心を見出して手紙を送った。それ以来、二人は文壇の親しい友人となっていた<sup>40</sup>。ラングは、レプリアを強く擁護し、個人的にも彼女を励ました。それ以外にも、レプリアの主たる発信媒体となっていた『アトランティック・マンズリー』には、レプリアを称賛し、実際アメリカ人作家は大した作品を生み出してはいないと論じる文章が掲載された<sup>41</sup>。

レプリアは、19世紀末における自らへの攻撃を、次のように振り返っている。「イギリスの文人と付き合うことは不品行とされていた。なぜマシュー・アーノルドを引用するのか、ローウェルを引用すればよいものを。なぜベッキー・シャープ<sup>42</sup>について書くのか、ヘスター・プリン<sup>43</sup>について書けばよいものを。なぜディケンズを面白がるのか、マーク・トウェインにすればよいものを。(中略) アメリカの少年たちはスコットランド人の封建主義から守られなければならない。アメリカ人の言葉はイングランドの英語の偏狭さから守られなければならない。私たちはこのように言われていたのだ」<sup>44</sup>。このような論調は、マシューズからの批判に重なるところが多い。

マシューズは、アメリカ人自身がアメリカ人作家やその作品を公正に評価しないことが、アメリカ文学の価値を高めるうえで大きな障害となっていることを問題視していた。そのため、一方でフランスの文学や演劇に精通しながら、1880年代以降はアメリカの言語文化の価値を論じることを、自身の評

論活動の重要な軸としていた。その立場からはレプリアの文芸批評は、ある本を評者がたまたまどう読んだのかに依拠しており、きわめて私的で偶発的なものとして受け止められた<sup>45</sup>。これは誤解なのか。レプリアがキャリアの初期にヘッカー神父から助言を受け、自身との関わりで事物を認識して書くことを学んだという逸話を思い起こすならば、マシューズの見解は実はある意味で的を射たものと言えるのではないか。批評に対する基本的姿勢が、マシューズとレプリアでは異なっていた。

アメリカの文化的独立を目指す立場から、マシューズはセオドア・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt, 1858-1919) と同志であり、そのキーワードは「アメリカニズム」(Americanism) であった<sup>46</sup>。多様化が加速しつつある当時のアメリカにおいて国民が自国に誇りを持つことの重要性を、ローズヴェルトは大統領就任のはるか以前から強調していた。そのためにはイギリスからの精神的自立性を高めることが大前提であったが、レプリアの言論活動はそれとは全く異なる方向にあった。ローズヴェルトとマシューズの書簡では、アメリカニズムに関する意見交換が多く見られるが、それとの関連で1890年代前半のやりとりにはレプリアの名前がしばしば登場する<sup>47</sup>。その存在は、本人の意識とは無関係に、アメリカニズムをめぐる議論において重要な位置を占めるものとなっていたのである。

## 結び

アグネス・レプリアは長い人生を著名人として生きたが、没後は顧みられることがなくなり再評価される様子もない。冒頭で紹介した歴史学者ジョン・ルカーチは、彼がフィラデルフィアの歴史書を出版した1981年にはまだレプリアの名前を覚えている市民が存在しており、実際に著作を読んだことがある人さえいたことを回想している。レプリアも述べていたようにフィラデルフィアは本好きの町ではない<sup>48</sup>にもかかわらず、である。しかし現在では、もはやそのような状況は失われた。時代の寵児も、同時代人が世を去るにつ

れて存在感が薄れていくことは避けられない。

しかしそれだけであろうか。ルカーチは、レプリアが読まれなくなった重要な原因がその文章スタイルにあるのではないかと推察している<sup>49</sup>。レプリアは広く英米文学やフランス文学に精通しており、実際に多くの作品を読んでいたと思われる。その反映として、彼女の文章には国外の文学者の言葉やフランス語を含む多くの引用があった<sup>50</sup>。それは彼女と同時代の文化を共有していた読者にとっては説得力を持ったであろうが、馴染みのない人名が頻出する文章は、時代の変化とともに時宜を失い、読者に古めかしさや読みにくさを強く感じさせるものになったと考えられる。

レプリアが書いた次の一節は、金言として今も知られている。「博学とは、ブラッドハウンドと同じで、鎖でしっかりとつながれていればかわいらしい。けれども解き放たれて学識のない無防備な大衆に向けられれば、全く魅力的でない」<sup>51</sup>。レプリア自身、博学ではあったが、自らの知識を披露することには慎重な一面を持っていた。シェイクスピアを主題とするディベートへの参加を依頼された際には「よく知らないことを伝えることはしたくない」という理由で断ったこともあった<sup>52</sup>。博識は制御されてこそ、と認識していたにもかかわらず、結果的には、レプリアの豊かな文学的知見が後世の読者を遠ざける遠因となった可能性は否めない。

しかしその一方で、レプリアの論考が同時代には説得力をもって受容されていた原因もまた、イギリス文学をはじめ海外の文学界や言論界の事情を豊かに取り込んだ、そのスタイルを抜きに考えることはできないだろう。イギリスからの文化的独立を課題としていた当時のアメリカは、成熟しつつある独自の文化への自信を深める一方で、多様な背景を持つ移民の急増により国民意識の軸が揺らぐことへの懸念も無視できるものではなかった<sup>53</sup>。レプリアの膨大な著述は、そのような時代におけるアメリカ社会においてイギリスの文学や文化がいかに受容され評価されたのかを考察するうえで、きわめて興味深い。

本稿では、アグネス・レプリアの親英主義的な姿勢に着目して論を進めてきた。その文学的趣味は終生変わることはなかったが、第一次世界大戦勃発後には、「アメリカニズム」を題名とするエッセイなど、アメリカに関する論考も発表して新たな面を見せるようになった。以降のレプリアは自国に対する問題意識を深め、同時期に面識を得た元大統領セオドア・ローズヴェルトとも気脈を通じることになる。アメリカニズムの推進者であったローズヴェルトのレプリアに対する当初の評価は低かった。時を経てそれが一変していることは注目に値する。このことについては、また稿を改めて論じたい。

## 註

- 1 John Lukacs, *Philadelphia: Patricians and Philistines, 1900-1950* (New York: Farrar, Straus, Giroux, 1981. New Brunswick, NJ: Transaction, 2015). John Lukacs, "Editor's Introduction." In Agnes Repplier, *American Austen: The Forgotten Writings of Agnes Repplier*, ed. John Lukacs (Wilmington, DE: ISI Books, 2009). 58.
- 2 Ibid.
- 3 Lukacs, "Editor's Introduction." 58.
- 4 Emma Repplier, *Agnes Repplier: A Memoir* (Philadelphia: Dorrance, 1957). 著者エマ・レプリアは、アグネス・レプリアの異母兄（父が最初の結婚で儲けた子）ジョージの娘である。エマによれば、ジョージは父の再婚相手と折り合いが悪かったため南米で暮らしており、アグネスはジョージが帰国した1869年に初めて対面して恋心を抱いた。アグネスは1882年母の死後にジョージを訪問した際に当時5歳のエマと初めて出会い、叔母と姪の親しい関係が始まった。
- 5 George Stewart Stokes, *Agnes Repplier: Lady of Letters* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1949).
- 6 Emma Repplier, 18.
- 7 Ibid., 16.
- 8 Ibid., 21.
- 9 Stokes, 37.
- 10 レプリア自身の後年の回想には、「1877年、私は20歳で執筆を始めた」という記述がある。Ibid., 8. しかしこれでは家計の危機が始まってから時が経ちすぎており、年齢の計算も合わない。歴史学者ルカーチはこれが彼女の鯖読みであること

を指摘している。Lukacs, 73.

- 11 Ibid., 59.
- 12 イギリスの批評家ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) を指す。
- 13 エリザベス・ロビンズは、1881年には『アトランティック・マンスリー』に文章が掲載されるなど、レプリアよりも一足早く文壇で頭角を表していた。1884年にアメリカ人版画家・画家のジョセフ・ペネル (Joseph Pennell, 1857-1914) と結婚し、以降はペネル姓を名乗った。夫妻はロンドンに居住して創作活動を続けた。
- 14 Stokes, 98.
- 15 Ibid., 96. Emma Repplier, 85-86.
- 16 ノートルダム大学が、その才能が芸術、科学を高め、教会の理念を示し、人類の遺産を豊かにしたカトリック教徒を毎年選び、教会暦の「薔薇の主日」(Laetare Sunday) に授与している。1961年にはジョン・F・ケネディ、2016年にはジョー・バイデンが受賞するなど、政治・経済の分野での活躍が理由とされる場合も多い。University of Notre Dame, “The Laetare Medal,” <https://laetare.nd.edu/about/> (accessed March 31, 2021).
- 17 Lukacs, *Philadelphia*, 103.
- 18 Emma Repplier, 171.
- 19 Agnes Repplier, “A Happy Half-Century,” *A Happy Half-Century* (Boston: Houghton Mifflin, 1908), 1-2.
- 20 *Public Characters of 1801-1802*, (London: Richard Philips, 1801), 437.
- 21 Agnes Repplier, “A Happy Half-Century,” *A Happy Half-Century*, 2.
- 22 Agnes Repplier, “Fiction in the Pulpit,” *Points of View* (Boston: Houghton Mifflin, 1891), 132.
- 23 Ibid., 134.
- 24 William Dean Howells, “Editor’s Study,” *Harpers New Monthly*, April 1886, 126.
- 25 William Dean Howells, *Criticism and Fiction* (New York: Harper and Brothers, 1891), 73.
- 26 イギリスの小説家ジェイン・ウェスト (Jane West, 1758-1852) を指す。
- 27 Agnes Repplier, “The Child,” *A Happy Half-Century*, 150.
- 28 Ibid., 73-74.
- 29 Ibid., 58.
- 30 Ibid., 76-77.
- 31 Agnes Repplier, “Literary Shibboleths,” *Points of View* (Boston:

- Houghton Mifflin, 1891), 90-91.
- 32 Agnes Repplier, “The Estranging Sea,” *Americans and Others* (Boston: Houghton Mifflin, 1912), 121.
- 33 *Ibid.*, 121.
- 34 Stokes, 100.
- 35 Address to the English-Speaking Union. Emma Repplier, 116.
- 36 *Ibid.*, 158. 時期や場所などの詳細は不明である。
- 37 Stokes, 119.
- 38 Brander Matthews, “Three American Essayists,” *Americanisms and Briticisms: With Other Essays on Other Isms* (New York: Harper and Brothers, 1892), 145-146.
- 39 *Ibid.*, 146.
- 40 Emma Repplier, 56.
- 41 Anonymous, “Contemporary Essays,” *Atlantic Monthly*, February 1894, 262-269.
- 42 ウィリアム・メイクピース・サッカレー『虚栄の市』(Vanity Fair)の主人公。
- 43 ナサニエル・ホーソン『緋文字』(The Scarlet Letter)の主人公。
- 44 Agnes Repplier, “Americanism,” *Counter-Currents* (Boston: Houghton Mifflin, 1916), 267-268.
- 45 Matthews, 148.
- 46 「英語のアメリカ的用法」という当初の意味からの発展で、アメリカのナショナリズムを意味するものとして用いられている。
- 47 具体的には次の文献を参照。Lawrence J. Oliver, *The Letters of Theodore Roosevelt and Brander Matthews* (Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1995).
- 48 Agnes Repplier, *American Austen*, ed. Lukacs, 58n.
- 49 *Ibid.*, 59.
- 50 この特徴については、キャリアの初期からブランダー・マッシュューズも指摘していた。Brander Matthews, “Three American Essayists,” 145.
- 51 Agnes Repplier, “Books That Have Hindered Me,” *Points of View* (Boston: Houghton Mifflin, 1891), 71.
- 52 Stokes, 101.
- 53 星条旗に対する「忠誠の誓い」(Pledge of Allegiance)の文言が幾度も修正されたことは、その例証と言えるだろう。

## 参考文献

- Anonymous. "Contemporary Essays." *Atlantic Monthly*, February 1894.
- Howells, William Dean. "Editor's Study." *Harpers New Monthly*, April 1886.
- Howells, William Dean. *Criticism and Fiction*. New York: Harper and Brothers, 1891.
- Lukacs, John. *Philadelphia: Patricians and Philistines, 1900-1950*. New York: Farrar, Straus, Giroux, 1981. New Brunswick, NJ: Transaction, 2015.
- Matthews, Brander. "Three American Essayists." *Americanisms and Criticisms: With Other Essays on Other Isms*. New York: Harper and Brothers, 1892.
- Oliver, Lawrence J. *The Letters of Theodore Roosevelt and Brander Matthews*. Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1995.
- Replier, Agnes. "Books That Have Hindered Me." *Points of View*. Boston: Houghton Mifflin, 1891.
- Replier, Agnes. "Literary Shibboleths." *Points of View*. Boston: Houghton Mifflin, 1891.
- Replier, Agnes. "Fiction in the Pulpit." *Points of View*. Boston: Houghton Mifflin, 1891.
- Replier, Agnes. "A Happy Half-Century." *A Happy Half-Century and Other Essays*. Boston: Houghton Mifflin, 1908.
- Replier, Agnes. "The Estranging Sea." *Americans and Others*. Boston: Houghton Mifflin, 1912.
- Replier, Agnes. "Americanism." *Counter-Currents*. Boston: Houghton Mifflin, 1916.
- Replier, Agnes. *American Austen: The Forgotten Writings of Agnes Replier*. Edited by John Lukacs. Wilmington, DE: ISI Books, 2009.
- Replier, Emma. *Agnes Replier: A Memoir*. Philadelphia: Dorrance, 1957.
- Stokes, George Stewart. *Agnes Replier: Lady of Letters*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1949.
- Public Characters of 1801-1802*. London: Richard Philips, 1801.